

# 法律事務所 家事手伝い

川口 世文



6

東京コンデ  
アパザルズ  
TOKYO CONTE BRIS

池袋で筧川《おいかわ》丈一郎と別れて〈三毛猫〉に戻ってきた圭介は、店のノートパソコンで早速〈FBエージェンシー〉という会社を調べてみた。

どうやらそれは主に撮影現場にエキストラを手配する事務所らしく、併設する〈FBスタジオ〉は彼らに演技指導をして料金をとっているようだ。怪しげな商売には変わらないが、筧川が乗りこんでいって、すぐに厄介なトラブルが起きることはなさそうだった。

1点だけ圭介が気になったのは、そのスタジオで指導している「講師」のメンバーのなかに、`荒熊、という男の写真が小さく紛れこんでいたことだった。圭介もよく知っている、青々とした髭の剃りあとと、手の甲に黒々と生えた毛がよく目立つ小男だった。

思えばこの男が〈三毛猫〉に出入りするようになってからろくなことがない。いつだったか荒熊は、圭介の妻宛に`冷凍庫で一晩じっくり冷やしてから、どうかお読みください、という謎のメッセージとともに、「恋人」を意味するタロットカードを届けにきたのだ——あのカードは結局どこにいつてしまったのだろうか？

ホームページ上の写真でも、荒熊は臙脂《えんじ》色の蝶ネクタイを締めて不敵に笑っていた。これだけ特徴のある男だから、カミさんといっしょに目撃されたのはこいつではない。だが、圭介はどうしてもこの男が1枚囁んでいるような気がしてならなかった。

その晩は閉店までが異常に長く感じられ、自宅に戻ってからよく寝られなかった。翌昼過ぎに筧川丈一郎から電話が来たときには、これ以上待たされたらどうにかなってしまいそうな気分になっていた。

「遅いじゃないですか——！」

たまらずに圭介が気持ちをぶつくと、筧川は電話の向こうで困ったような声を出した。

「そうはいつでも夏越さん、まだ半日しか経っていないですよ」

確かにそうだった。いくら筧川でもたった一晩で調査を進展させられるわけがない、と圭介は少し反省した。

「すみません、どうも混乱していて……」

「その後、奥さんから何か連絡は？」

「昨夜、息子たちに電話がかかってきたようです。特に変わったようすではなかったと……」

「何だ、携帯電話は通じるんじゃないですか？」

「それが、今朝になって私が電話しても応答がなくて……」

圭介は素直に状況を説明した。これだけで妻が軽井沢にいないという証拠にはならない。冷静に考えればまだ圭介の`思いすごし、の可能性が高い。

「お子さんたちに電話があるのなら、次に連絡があったときに、滞在場所を再確認してもらったらどうですか？」

筧川にごく冷静にそういわれて、なるほどそのとおりだと思った。それぐらいの発想が出てこないほど平静

を失っているのかと、圭介は気持ちが凹むのを感じた。

「ところで夏越さん——」

圭介の動揺を知ってか知らずか、笈川はのんびりした口調を変えずにつづけた。

「——1つお願いがあるんですけど」

「何でしょうか？」

「今晚、そちらのお店のテーブルを予約したいんですけど。それから手ごろなシャンパンと誕生日用のケーキをお願いすることは可能ですか？ そんなに大きいものでなくていいんです。人数は4人だけですから……」

いきなり何をいい出すのかと思ったが、笈川の要望を断る理由はなかった。

だが、そのあとにつづいた彼のさらなる希望を聞くと、圭介はどうにも訝《いぶか》しく思う気持ちを抑えられなくなった。

「……それと、今夜ぼくがお店にうかがうとき、夏越さんがぼくを知っている素振りはみせないでほしいんです。初めての客がやってきたような顔をしていてくれませんか？ 当然、ぼくの名前も知らないことにして……」

「いいですけど……」

戸惑いながら了承したものの、こう質問せずにはいられなかった。

「その話は、私の妻の件と何か関係があるんですか？」

「それは……」

と、電話口の向こうで笈川が少し間を置いた。

「今夜のイベントが終わったあとに、あらためて電話を入れます」

×

予約した時刻に笈川丈一郎は4人連れで〈三毛猫〉に現れた。連れの客は彼の両親ぐらいの年齢の年配の男女と、今日が誕生日で20歳になったばかりだという娘。

どう見たって笈川が家族を連れてプライベートでやってきただけじゃないか？——謎めいた事前連絡を受けてドキドキしていた圭介はすっかり拍子抜けした。

「予約席」の札を出しておいたテーブル席に4人を案内する。その札は以前は息子が「父の日」に作ってくれたものを使っていたが、圭介の幼なじみで悪友の不動正義《まさよし》にケチをつけられた後、これでどうだとばかりに金ピカの安っぽいプレートに替えた。だが、それも店の雰囲気にならなかったため、今は銀製のしゃれたデザインのものを使っていた。

圭介は約束を守って、笈川とは初対面のフリをした。相手もまるで知らんぷりだった。20歳になった`妹、がよっぽどかわいいのか、盛んに彼女を気にしている。

`妹、はテーブルについた当初は少し緊張していたが、生まれて初めて——少なくとも建前では——シャンパン

を口にしてからは徐々にリラックスしていった。圭介が準備したイチゴをふんだんに使ったケーキに、2本の花火と「20」の形をしたキャンドルが載っていることに気づき、さらに周囲のテーブルの客たちからも拍手を贈られると、感極まった顔でそのキャンドルを吹き消した。

20歳の妹、は目に涙さえ浮かべていたし、両親も、兄の筧川も実にいい顔でそれを祝福している。今どきこんなほのぼのした家族もいるんだな——遠目で4人の姿を見守りながら圭介は少しビックリしていた。

4人は最後まで幸せそうな雰囲気のまま、10時すぎには帰っていた。ずっと知らんぷりをしていた筧川は会計を済ませた後で一瞬だけ圭介に向かってうなずいてみせた。

この数日ずいぶん世話になった筧川に、自分にしかできない形で恩返しができる気がして、圭介も気分がよかった。急な要望にうまく対応できて、心からホッとしていた。思えばここ数日間ではじめて、妻の心配から解放されたような気がする。

筧川の狙いもそこにあったのだろうか？ いったい彼は大学の非常勤講師として何を教えている人なんだろう？ カミさんの件が一段落したら、ゆっくり彼の話聞いてみたいものだ。

そんな気分だったから、その晩筧川から連絡がなくても仕方がないと思っていた。遅くならないうちに自宅に電話を入れて、今夜ママから電話があったら、彼女が女友達と一足早い夏休みを過ごしている別荘、の連絡先を確認しておくように長男に頼んでおいた。

×

筧川が遅くに電話してきたとき、後片付けを終えた圭介は店の入口に鍵をかけているところだった。施錠を確認すると、彼は歩きながら話をすることにした。この時間でも町はまだしつこい蒸し暑さに支配されている。

「さっきはありがとうございました」

筧川は特に酔っぱらっている感じではなかった。

「妹さんも喜んでいただいたようで、よかったですよ」

圭介は満足そうに答えた。

「妹？……ああ、あの娘《こ》ね」

筧川のその表現が気になった。

「どういう関係に見えました、ぼくら4人？」

さらにおかしな物言いをしてくる。

「どういう関係って……筧川さんの家族なんでしょ？」

「そう見えましたか？」

「そう見えたも何も……そうなんでしょ？」

「……なら、よかった」

「笈川さん、知っていることが何だかヘンですよ」

不審に思いはじめた圭介がそういうと、笈川は、

「実はあの4人は本当の家族じゃないんです。見ず知らずの他人、しかも今日の夕方出会ったばかりなんです」

「またまた……」

やっぱり笈川は酔っばらっているのかもしれない。

「〈F B エージェンシー〉という会社が何をやっているかご存知ですか？」

「エキストラを派遣する事務所でしょ？」

「ええ、メインの事業はそうなんです、裏で別の仕事もしているんです。‘裏、’といっても別段法律に触れる仕事ではないんですが……」

「はあ……？」

ますます相手の知っていることがわからなくなった。

笈川もそれを察したようで、ズバリ答えてきた。

「つまり、家族の‘レンタル、’をしているんです——」

「家族の…… ‘レンタル、’？」

「噂には聞いていましたが、ぼくも本物に出会ったのははじめてです。さっきのあの家族も、ぼくを含めて全員 ‘レンタル、’されたんですよ。あの娘の誕生日を祝ってあげるために、彼女自身に雇われたわけです……」

「笈川さん、酔っばらっているでしょ？」

圭介は目白通りの手前で立ち止った。

だが、笈川はいつもの調子でゆっくりと彼に説明をつづけた。昨日圭介と別れた後、〈F B エージェンシー〉に乗り込んでいった彼は、その場で ‘レンタル家族要員、’の登録を済ませ、〈F B スタジオ〉という附属の稽古場で簡単な講習を受けた。そして、そのルックスと雰囲気を買われて、早速最初の ‘ミッション、’を与えられたのだという。

自分の誕生日を祝ってもらうために家族を雇ったという、あの若い娘の心境は圭介にはよくわからなかった。今はそれよりも先に確認することがあった。

「それで、その ‘レンタル家族、’が、うちのカミさんとどう関係してくるんですか？」

「お借りした写真を持ってこっそり聞いて回ったところでは、奥さんもここに登録しています。数日前には実際に ‘仕事、’もしていたらしいです。お店のお客さんに目撃されたのは、たぶんそのときなんだと思います——」

圭介はその言葉を聞いて思わず額に手を当てた。啞然としていた。

笈川の言葉をそのまま受け入れるとしたら、妻は自分の家族にウソをつけて、放っばりだして、他人と家族をやっていることになる——それはいったい、どういうことなんだ？

「……それで、カミさんは今どこにいるんです？」

彼女はいったい今、どこの ‘家族、’にいるんだ？

だが、そこで笈川は急に言葉のトーンを下げた。

「残念ながらそれはまだわかっていません……引き続き調査を進めます」

「そうですか……お、お願いします」

圭介はそう応えるしかなかった。暑さにやられておかしくなっているのは自分ではないかと急に怖くなってきた。

※この作品はフィクションです。

(2013年7月22日公開 ©Seven Kawaguchi 2013)